**「豊かな憐れみによって罪をおゆるしください」**

**年間第24主日・Ｃ年（16.9.11）**

**いつくしみの特別聖年にあたって**

昨年の4月11日に、教皇フランシスコは、その大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」によって、2015年12月8日から今年の11月20日（「王であるキリストの祭日」）までを、「いつくしみの特別聖年」と制定されました。ちなみに、「聖年」とは、教会の伝統において定められる25年ごとの年を意味します。その年には、「教皇が定めるいくつかの条件を満たす信者に、全免償（赦された罪に伴う償いが免除されること）が、与えられるという」伝統であります。

　また、特別聖年というのは、特別な意向のために定められた聖年にほかなりません。

　ですから、この度の特別聖年のための特別な意向を、教皇はその大勅書で次のように説明しておられます。

**「わたしたちのまなざしを、もっと真剣に神のいつくしみへと向けるように招かれるときがあります。わたしたちが、御父の振舞いを示すあかしとなるためです。これこそ、わたしが、このいつくしみの特別聖年を宣言した理由にほかなりません。この特別聖年は、信者のあかしがより力強く、より効果的になるために、教会にとってまさにふさわしい時となることでしょう。」（3項）**

では、早速、今日の聖書朗読箇所ですが、特に第一朗読と、福音がいみじくも神のあわれみといつくしみを見事に語っているのではないでしょうか。

**主なる神は、民にくだす災いを思い直された**

まず、第一朗読ですが、旧約聖書の二番目の書物「出エジプト記」の32章からの抜粋であります。実は、この出エジプト記は、特にイスラエルの民をエジプトの奴隷の家から解放なさるあれみの神をいともドラマッティクに物語っていると言えましょう。ですから、その3章で、主なる神が、モーセに向かって次のように自己紹介をなさいます。

**「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、その酷使する者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それ故、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々とした土地、乳と蜜の流れる土地・・・・へ彼らを導き上る。」（出エジプト3.7-8）**

　このように主なる神こそは、苦しむ人々を救い出す、まさに憐れみの神にほかなりません。

　ところで、そのエジプトの奴隷の家から解放されたイエスラエルの民ですが、ようやく神の山シナイにたどりつき、その麓に天幕を張って宿営していたときのことです。すでに、十の掟で、偶像を拝むことを禁じられていたのもかかわらず、まさに自分好みの神々を造ってしまったというのであります。

　ですから、さっそく神は、モーセに向かって次のように命じます。

**「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は堕落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鋳造を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」**と。

　実に、神に選ばれたイスラエルの民が、真の解放者である憐れみの神を、なんと牛の像に変えてしまうという罪を犯したのであります。

　ですから、当然なこと、神は厳しい罰を下すことを、次のようにモーセに知らせます。

**「わたしは、彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」**と。

　ところが、それに対して、モーセは神の憐れみに訴えます。

**「主よ、どうしてご自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。・・・**

**どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起してください。・・・」**と。

　そこで、いつくしみ深い神は、**「ご自分の民にくだすと告げられた災いを思い直された。」**のであります。

　つまり、イスラエルの民が、自分たちの罪を悔い改めたからお赦しになったのではありません。なぜなら、罪の赦しは、人間の行いに先立って与えられる神の無償の愛だからであります。

**悔い改める罪人についての大きな喜び**

次に今日の福音ですが、神から離れていた罪人を見つけ出したときの神の大いなる喜びを、三つのたとえで見事に描いていると言えましょう。

　まず、最初の「見失った羊」のたとえでは、**「百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ってとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで探しまわらないだろうか。・・・言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」**

また、二番目の「無くした銀貨」のたとえでは、**「そして見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒の喜んでください。』と言うであろう。・・・このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」**と。

　最後の最も感動的な「放蕩息子」（「聖書と典礼」では割愛されている）のたとえでは、いつくしみ深い父親が、すねてしまった長男に次のように諭す場面で締めくくられています。

**「だか、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶには、当たり前ではないか。」**と。

　ちなみに、ルカは、敵をも愛しなさいと言うイエスな勧告の最後を、つぎのようにまとめております。

**「いと高き方は、恩を知らない者にも、悪人にも、情け深いからである。ああなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」（ルカ6.35c-36）**

　今週もまた、日々出会う一人ひとりに、神のいつくしみをあかしできるように共に祈りましょう。